

『三葉集』

田漢・宗白華、郭沫若著

「宗白華より郭沫若と田漢への手紙及び田漢より宗白華への手紙」

(原題：「宗白華致郭沫若 宗白華致田漢 田漢致宗白華」)

顧 文* 岩佐昌暲**

Kleebatt by Tian Han, Zong Baihua & Guo Moruo

Letters to Guo Moruo from Zong Bai hua etc. With Annotation by

GU Wen, IWASA Masaaki

【宗白華より郭沫若への手紙（1－7）】

沫若先生：【1】

昨日、あなたからの手紙と新詩を受け取り、大変嬉しく思いました【補注1】。あなたとは面識こそありませんが、すでに久しく傾慕の念を抱いてきました。あなたの詩は僕の最も愛読するものです。あなたの詩の境地は僕の境地でもあります。一首一首読む毎に、慰められます。僕の心中にも同じような情緒があるからですが、しかし、ふだんは「概念の世界」でカントの哲学¹を分析することが多く、そうしょっちゅう「直感の世界」で自然の神秘を感じているわけではありません。たまたまこのような清妙、幽遠な感覚が起ることがあっても、とっさに名言を得て、それを表現することができません。また僕は従来、我々の心中には詩意、詩境がないわけにはいかないが、必ずしも詩を作る必要はないと主張してきました。ですから沢山の詩稿があっても形にならないままに打ち

捨てていました。今あなたの詩が僕の詩境を代表していると言える以上、それを僕の詩だと見なしでも差し支えありません。あなたは許してくださいでしょうか？

沫若、あなたには *Lyrical*²の天賦の才があります。僕は、あなたにできるだけ自然と哲理に接近し、円満、かつ高尚な「詩人の人格」を養いながら、その一方で、できるだけ古えの天才たちの詩の自然な音節、自然な形式を研究し、「詩の構造」を完全にしてくださいることを切に願っています。そうすれば中国新文化に真の詩人が現れてきます。これは僕の心からの期待です。なぜならば、あなたはこのような天賦の才能を備えているからです。僕のお世辞ではありません。

僕には、田漢という友人がいます。彼は欧米文学に深い造詣があり、今東京に留学中です。おそらく彼はあなたとは主張や志向で意気投合できる人です。あなたたち二人が手を携え、アジアの未来の詩人になることを願っています。もし時間をつくって彼に会いたいと思うなら、紹介します(この手紙を持っていけば良いです。僕たちの交流は、もっぱら精神を重んじます。形式は不要です)。

*東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

**九州大学名誉教授 日本郭沫若研究会会長

¹ カント (Immanuel Kant, 1724-1804)、ドイツの哲学者。古典観念論の創始者。『純粹理性批判』と『実践理性批判』などを著す。

² 英語：抒情的。

今年は『学灯』¹欄に、価値のある文芸作品と、学術的理論的な文章を多く発表したいと思っています。常時、寄稿して頂けますか？新作が書けたら、すぐに送って下さい。

宗 白華 九、一、三
【民国9年、大正9年、1920年】

沫若先生：【2】

僕の前信はきつともう届いたことでしょう。あなたの詩はすでに次々と発表しています。『学灯』欄には、毎日一首、あなたの新詩を発表し、一種の清々しい香り、一種の自然 Natur²の爽やかな香りを漂わせたいと望んでいます。あなたが Pantheist³であることに、僕も賛成です。僕も詩人の宇宙観に Pantheismus⁴が必要であると主張しているからです。近い将来、『ドイツ詩人ゲーテ Goethe の人生観と宇宙観』という文章を書くつもりです。この中で、詩人の宇宙観は Pantheism が最も適当であることを説明しようと思います。あなたにも手伝ってほしいです。関係資料を提供してください。

詩人と Pantheism との関係について説明できる詩を何首かお願いしたいと思います。僕の文の前言、或いは最後のまとめの言葉として、如何でしょうか？ただ僕も長く文学の文字を書いていませんので、この文で僕の思想を書き表すことがで

きるかどうか、まだ分かりません。

白 華

沫若先生：【3】

君の長い手紙を最初から最後まで何回も読み返しました。嬉しくて感激に堪えません。なぜならば、僕の思想、僕の学識、僕の見解と同じような良き友、或いは僕を遥かに越えた良き友もたくさんいますが、しかし、僕の心の深層にある感覚、個性の中に ある靈知、直覚の中にある思想見解に関しては、君のほうはずっと僕と近いと思うからです。ですから君の詩を一読して、すぐこれも僕が創るべき詩であったと感じました。ただ僕の代わりに作って下さったというだけではありませんから、僕は嬉しくてたまらないのです。実現すべき僕の一部分がすでに実現されたような感じで、おかげ様で他の部分を全力あげて実現することができると思うのです。

以前田寿昌が上海にいた頃、彼に言ったことがあります。君は文学から次第に哲学に入ってきたが、僕は恐らく哲学から次第に文学に入って、そこで終ることになるだろう、と。僕は哲学を学ぶ中で、宇宙の実相は芸術で表現するのが最もよいが、それは純粋な名言で書き表せるものではないと思うようになりました。ですから僕は、将来、最も的確な哲学はまさしく一首の『宇宙詩』になると思います。僕の将来の仕事も全力をあげてこの詩を創る作業の一部に加わることだけです。(恐らく僕たち三人の道も同じでしょう)しかし、僕の現在の才知は結局まだ理解の面に偏っています。感覚と情緒もいくらかありますが、欠けているのは芸術の能力と訓練です。小さい頃からずっと形式方面の芸術手段を嫌ってきました。形式の重要性はよく知っているのに、いつも注意を払っていませんでした。ですからふだん偶然に「詩的衝動」や、或いは君の言う Inspiration がうまれることもあります。しかし、結局、結晶世界の自然な意思と同じように、一瞬向上への衝動があり、無機から有機へ転換したいと思

¹ 上海『時事新報』の学芸欄。1919年夏から1920年3月まで宗白華が責任編集者であった。郭沫若は1919年9月11日より、この学芸欄に新詩などの作品を発表した。

² ドイツ語：自然。

³ 英語：汎神論者。

⁴ ドイツ語：汎神論。汎神論は、16世紀から18世紀まで流行した一種の唯物主義自然観を有する哲学の学説である。世界には超自然の主宰者と精神的な力の存在することを否認し、神は自然界そのものであり、自然界のすべての事物の中に存在していると考え。代表人物には、イタリア哲学者のジョルダノー・ブルーノ【1548-1600】とオランダ哲学者のベネディクトゥス・スピノザ【1632-1677】がいる。

っても、いつもやはり機械律に制約され、有機的な「形式」(アリストテレス¹の Form²)を得て、動きまわることの自由な有機生命に変れません。つまり一つの「個体の生命の源流」の表現に成り得ないのです。僕の問題として、それを「書き」出せないから、だからこそわざわざ「作り」たくないのです。

君のゲーテに対する観点は僕と同じです。ですから僕たちの考え方がすごく一致していても、もう不思議に思いません。僕の「ゲーテの宇宙観」はなかなか書けないでいます。こちらは、ゲーテについての書籍も大変少ないし、僕もまた詳細な研究と精密な分析をしていません。そのうち自分の直感だけに頼って書き、他の人に過ちを正してもらおうほかありません。

君は東の島【中国から見て東にある島国。日本。】の海浜で、常に大宇宙の自然な呼吸に接しているし、また解剖室の中で、常に小宇宙の微生物の生命に接しています。宇宙にある意志の実相もすべて君に覗かれています。君の詩神としての前途は無数の希望に満ちています。

夜も更けました。限りない情緒がすでにこの漫漫たる闇と一緒に朦朧たる境地に溶け入ってしまいました。また話しましょう！

君の旧詩、君の身の上の話、すべて僕を凄然たる思いにさせました。もうこれ以上ふれるに忍びません。

宗 白華 九、一、三十夜。

【民国9年、大正9年、1920年】

沫若兄：【4】

君の鳳凰がいままだ大空で回旋しています、君の天狗がまた飛ぶように疾走してきました【補注2】。君のこの詩の内容の深い意味について、僕は *Pantheistische Inspiration*³ という語で表したいのですが、そういう理解は正しいでしょうか。君を取り巻く自然環境が羨ましくてなりません。ここ【上海】には、接することのできるような自然の美もなければ、社会の中心まで深く入りこんで、人間性を直に窺い、表現することもできず、友達との行き来などありません。本当にいささかくさくさしています。ただこのほかに文学の名著を持ってきて読みふけることはあります。昨日も *Ekkehard*⁴ を読み通したので、とても愉快でした。その後半の *Resignation*⁵ についての描写は、僕に一種の解放と超脱的な安寧を与えてくれました。今僕も切に願っています。ひと気のない、ひっそりした森林の奥に行き、以前無意識に種々の身の程知らずの望みを抱いていたことを懺悔して、落ち着いた適切な小さいが実効的な事業に専念しよう、と。(僕は、*G.Frenssen's Joern uhl*⁶ をまた読みなおしてみました。これもすごくよかったです。君も読んだことがありますか？今僕はこの類の小説を愛読しています。なぜならばそれは正しい人生観を与えてくれるからです)。今日また偶然にも *Faust* にざっと目を通してみました。その *Prologim Himmel*⁷ は本当に凄いです。それを訳してみませんか？やってみたらいいです。もし訳出して下さったら大変有難いです。書こうと思っている『ゲーテの人生観と宇宙観』は簡単なもの

¹ アリストテレス (Aristoteles, 前 384-322)、古代ギリシャの哲学者、文芸理論家。『オルガノン』、『詩学』などを著す。著書『形而上学』の中で、物質の客観的存在を認めると同時に物質から独立した、物質より高度な能動的な形式の存在も認めた。物質が進化して形式になってはじめて生命を構成するという。ここでの「有機的な形式」は、即ちこの意味である。その次の「個体生流」とは、即ち「個体の生命の源流」である。

² 英語：形式。

³ ドイツ語：汎神論の靈感、インスピレーション。

⁴ ドイツ語：『エッケハルト』。ドイツ作家シエフェル (Josef victor scheffel, 1826-1886) の長編小説。1857年に発表された。

⁵ ドイツ語：隠退。

⁶ ドイツ語：フレンセンの『イエレン・ウール』。フレンセン (Gustav Frenssne, 1863-1945) とはドイツの小説家。

⁷ ドイツ語：『天上の序曲』。『ファウスト』の第一部の中の一節である。

ではなく、どう書けばよいかまだ分かりません。その上僕のところには参考になる書籍もあまりないので、すべて僕の直感、及び Faust と彼の小伝や自伝の中から論拠を集めたものが頼りです。ですから、どんなものが出来上がるのか、まだ分からないのです。

君の鳳歌¹は、力強く、美しいです。君の詩は哲理を骨格にしています。だから意味も濃くて深いのです。今時の新詩の多くが、読み終わるとたちまち味がなく素漠としているのとは違います。ですから白話詩は、作品を飾る詩的な語彙がない代わりに、とりわけその思想境地及び真実の情緒を重んじるのです。僕のところにはドイツ語の書籍が殆んどありません。日本には新しい書籍が来いますか？僕はできるだけ多く哲学、科学、文学、芸術類の書籍を入手したいので、僕の替わりに気をつけておいてください。買う価値のある書籍を見つけたら、買いますのですぐ知らせてください、しかし福岡あたりでは恐らくそんなに沢山の書籍を探すこともできないでしょうか。夜も更けました、続きはまたにします。

白 華

九、一、七。²

沫若兄：【5】

五日付けのお手紙をまた受け取りました。何日か前に君に手紙を出したと思いますが、こちらの方も恐らく届いたことでしょう。君の真意をもう一度詳しく書いて頂き、本当にありがたく感激です。君のあの長い手紙も実は君の許可なしに発表してしまいました³。もちろん責めたりしないでしょね。僕は、世界で一番誠実を重んじているのは詩人であり、だから公開できない詩人の文字などないと思うからです。『天狗』という詩は君の真実の感覚から発したもので、どう見ても存在す

る価値があります。しかし、僕の感じでは君の詩は、表現された境地については言うことはありません、ただ形式の面ではなお注意を要するところがあります。詩の形式の美について、君は、康白情⁴と正反対です。彼の幾つかの詩は、形式構造の面で複雑すぎ、読む者にはちょっと面倒だというきらいがあります(『疑問』⁵一編はまたいいほうで、このような欠点がありません)。君の詩にはまた、ちょっと単純化していて柔軟性がなく、さらに、流動的な曲折の動きが欠けるきらいがあります。ですから君もすこし考察し、研究してほしいと思います。君の詩意と詩の境地(表現する世界)は豪放で、率直に傾き、勇壮な大詩【短詩を意味する小詩(補注3)に対する語。長詩。】を作ることに向いています。だからこそ僕はまた君に鳳歌のような長詩をたくさん作って欲しいのです。このような新詩は国内では作れる者は甚だ少ないので、君は将来これをもって頭角を現されることでしょう。しかし、君の小詩【補注3】の境地もどれもみな悪くありません。ただ構造の面でやはり曲折と優美性が必要なのは、詞【補注4】の中の小令【詞(補注4)の短いもの】と同じです。詩意は簡単で奥深い、字句は少ないが精巧でなければいけません。これらはすべて僕の全くの直感(実を言うと、僕はこれまで詩と詞の研究を本当にしたことがありません。昔からずっと詩を作ろうなどと考えたこともありません。文学と詩学についての見解はすべて直感によるもので、確たる根拠を言うことはできません)です。君はどう思いますか？君の意見も正直に教えてください。僕のこの偶然の感覚は恐らく頼りになりません。昨日『新詩略談』⁶なる一篇を書きました。すべて僕の直感

⁴ 康白情(1896—1945【1959年の誤りか】)、字は洪章。四川安岳県の人。少年中国学会会員、詩人。詩集『草兎』を著す。

⁵ この詩は、1920年2月4日の『時事新報・学灯』に発表。

⁶ この文は1920年2月9日の上海『時事新報・学灯』に発表している。また同年2月15日に刊行している『少年中国』第一巻第八期「詩学研究

¹ 郭沫若の長詩『鳳凰涅槃』を指す。

² 「九、二、七。」であるべき。

³ 郭沫若の1月18日付、宗白華への手紙を指す。1920年2月1日の『時事新報・学灯』に発表。

白 華

による見解です。……僕は直感に反対するものですが、自分は実際には直感的な人間だと思います。おかしいですね……僕がこれまで読んできたのは哲学、科学の本であり、文学、詩と詞は純然たる時間潰しや、気晴らをするものでした。しかし、それらのものに対して生まれる直感的な感想だけは多いのです。これもまたおかしいことです。これはいわゆる中国人の遺伝的な文学的頭脳というものでしょうか。とは言え、平素僕の心の奥の楽しみもやはりここにあります。ですから僕がそこで書いた「文学的頭脳を打破する」という言葉も中国の旧式文人の頭の回転の弊害……分析を欠き漠然とし、つかみどころがない、おおざっぱで中身がない、根拠なく独断的である、等々……に対した言ったものです。僕が『新詩略談』で「詩」に下した定義も内容のないものでした¹（散文を含めて）。僕の代わりにもっと適切なものに修正して頂けますか？

時珍さんが来ました。君たちが以前に起こした騒動事件も教えてくれました【補注5】。人たれか過ちなからんや。若い時はひと時の感情に任せて、特に常軌を逸した行為をしやすくなると思います。人が間違っただけでも、懺悔さえすれば、またいくつか良い社会活動をすれば、帳消しされると僕はずっと思っています。人類はすべて過ちを犯すものです。ただ向上のための自己改造と向上しようとする強い気持ちさえあれば、良い人になるのです。時珍さんもこの見解です。彼も君の長い手紙を読んで感動していました。ですから彼も君の将来に無限の希望をもっていますよ！

号」(上)にも載せている。

¹ 『新詩略談』に詩の定義について、「私は詩の内容を二つに分けることができると思う。それは「形」と「質」である。詞の定義には本来は「美しい文字を用いて人の境地を書き表すものです。ここで書き表すものは、適切な文字が詩の「形」であり、表現する境地が詩の「質」です。言い換えれば、詩の「形」は、詩の中での音節と語句の構造であり、詩の「質」は、詩人の思想情緒であります。」という。

沫若兄：【6】

前後にして頂いたお手紙と詩、いずれも受け取りました。君が寿昌に宛てた手紙【補注6】も読み、とても感動しました。公平に言うならば、純真な恋愛の中から生まれた男女の結びつきは極大の罪には入りません。まして君に懺悔する真心と【国難に負けず】向上しようと突き進む力があるのだから、君の罪もただ君の心の中のMephistopheles【メフィストフェレス】にすぎず、たまたま君が人格の向上のために行う新しい努力を磨き鍛えているにすぎないのです。君は西洋文芸から……ルソー、レフトルストイなど……の中から一つの誠実な精神、懺悔する勇気を育てあげました。とても喜ばしいことです。このことから西洋文芸にはこの種の特性のあることが見出せませぬ。それは東洋文芸にはないものです。

君の『天上の序曲』と Zueignung【献呈】の翻訳、ともに悪くありません。大したものです。ゲーテ文芸の中国入りは君から数えることになりましょう。ゲーテの天国の霊もさぞかしとても愉快に違いありません。僕が書こうとしている『人生観と宇宙観』は、参考にした資料が充分ではなく、精密な分析になっていないように思われ、いい加減に書きたくありません。ドイツからの書籍が手に入るのを待て、更に広く研究し、それから詳細な紹介を書きたいと考えています。ですから当分の間は発表できないのです。しかし、いつか執筆にかかりたいと思います（ドイツの書籍もすでにドイツに注文しました）。

君の二篇もしっかり保管しておきます。暫く置いていつか発表したいと思います。

君が詩を論じた文²に僕は完全に同感です。僕の

² 1920年2月16日に郭沫若から宗白華への手紙を指す。1920年2月24日の上海『時事新報・学灯』に発表している。この後でこの手紙は「明日発表することになりました」と述べているので、宗白華のこの手紙の日付は1920年2月23日であ

書いた短編の不十分な点を補うことができます。それで明日発表することにしました。今日、僕は大きく『新文学の源泉』¹を書きましたが、自分の本当に言いたいことをはっきり言っておらず、大変不満です。後悔しています。自分の素養と研究が足りなすぎます。急いで困難を恐れず前進しなければいけません。僕は、現在骨身を惜しまず努力して、生物学と心理学を研究し、その基礎の上に、さらに哲学文学芸術を研究したいと思いません。三年後、その成果を見て下さい。

仿吾君【成仿吾】のところには、近いうちに連絡するつもりです。彼の詩と君の『嘆逝』を今月の内に載せ、僕の『学灯』の Schmuck²にしたいと思いません。

『学灯』は君の詩を得て、色彩がさまざまに増えることになりました。新聞社【時事新報社。『学灯』は時事新報の付録】からわざわざかですが、卑俗な物質【原稿料】を出して、君の高貴な精神に馴染みます、本当に無礼になりかねないですが、しよせんつまらない問題であり、大したことはありません。話すことではありませんね。夜も更けました。また！

白 華

Es freut sich die Gottheit der reuigen Sunder:
Unsterbliche heben verlorene Kinder
Mit feurigen Armen Zum Himmel empor.

—— Goethe's

“Der Gott und die Bajadere”——³

沫若兄：【7】

「光る海」詩の境地と芸術性ともに素晴らしいです。更に進歩が見えます。僕は君のファウスト

ると推測できる。

¹ この文を 1920 年 2 月 23 日上海『時事新報・学灯』に発表した。

² ドイツ語。玉飾り。

³ ドイツ語。懺悔している罪人は 神の歓喜（よろこ）び 彼は神の失った嬰兒 天上人が燦爛たる神の光のよう腕を伸ばして、彼を天上に渡らせた。——ゲーテ『神と踊り子』

の訳詩を持って、「松社」【補注 7】にある花畑の緑茵【緑の芝生】上で仰向けに寝ころびながら詳細に読んでいます。この数日来溜まっている市中の大量の俗塵を払い、急に自分が別の一つの荘厳な世界に身を寄せた感じがします。今日この作品を『学灯』⁴に発表しました。沢山の青年たちに僕と同じようにこの詩的世界を享受してもらいます。君が注ぎつくした心血も無駄にならないでしょう。寿昌も恐らくもう来たんじゃないありませんか？僕は遙かあなたから、君たち二人が海辺の砂浜で飽きもせず、延々とおしゃべりし、話が人生、芸術の神秘の境地まで行きついたとき、必ずや互いに顔を見合わせて笑い、意気投合しているに違いない様子を想像しています。残念ですが、僕は、その余韻を密かに聞くこともできず、またわずかばかり詩人の秘密を覗いて、それを自分の芸術理論の研究にすることもできません。しかし、やはり君たちが談話の中の偶然な論議から得た不思議な思想を記録し、送ってほしいです。たとえその糟粕でも享受することができれば、もう幸いの極みです。

時珍、潤瓊たちは、まもなく 4 月 1 日一緒にドイツへ留学に赴きます。僕も二年の内に各方面の準備をするつもりです。それからヨーロッパに行き、欧州文化の研究をします。しかしこの願いが実現できるかどうかは分かりません。

今、君への一通の手紙を受け取りました。君に転送するように頼まれました。君もそれを見たら、彼の期待に背かないようにして下さい。

白 華

【宗白華より田漢への手紙（1）】

寿昌兄：【1】

⁴ 郭沫若訳した『風光明媚なところ』（『ファウスト』第二部の第一幕）は、1920 年 3 月 20 日の上海『時事新報・学灯』に発表している。ここで宗白華が「今日、『学灯』で世に知らせました」というので、この手紙は 1920 年 3 月 20 日に書いたものだ推測できる。

またも大分ご無沙汰してしまっただけ、眼を閉じれば、僕はいつも君がそちらで読書したり、文章を書いたり、詩を作るのを想像している。きっと楽しいだろうね。僕よりずっと良い。僕はいまとても悩んでいる。とてもおもしろくない。上海というところと僕が現在過ごしている機械的な生活で、僕の思想は広がらず、気持ちも落ち着かない、意志も自由にならない。もし僕が依然としてこれまでの耽美主義¹と暗黒の研究……つまり人類社会の暗黒的な一面の研究……を続けているのでなかったら、僕も本当にシラー²の真似をして逃げだしてしまっただろう。

だが、近頃凄く嬉しいことがあり、僕の数えきれない煩惱を減らし、多くの慰めを与えてくれたんだ。それというのが、僕はまた君のような友、アジアの未来の詩人郭沫若を得たんだよ。

彼にはもう手紙を書いた。君を紹介し、君と通信して、君の詩の友になってほしいという内容だ。もうこの事を知っているかい？これから彼の近作の長詩一首と、僕に送ってくれた詩についての長い手紙³を君に送って読んでもらう。彼がどういう人であるか、彼の詩才はどうか、君はすぐ知るだろう。(また彼に書いた僕の返信も見せます)

¹ 10世紀後半にヨーロッパで流行した資産階級の文芸思潮。文芸が現実と政治から離れることを主張し、「芸術のための芸術」を標榜した。最初に提起したのはフランス作家ゴーティエ【1811 - 72】であり、代表的な作家にはイギリスのワイルド【1854 - 1900】などがある。

² シラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805)。ドイツの詩人、劇作家。『ヴァレンシュタイン』、『たくらみと恋』を著す。初期の劇曲『群盗』は、封建社会に戦いを挑む義侠心のある青年を賛美する作品である。上演後、シラーは迫害され、二か月間の幽閉もされ、かつ創作活動も禁止された。迫害に耐えられなくて1782年にヴェルテンベルク王国のシュトゥットガルトを逃げ出し、ライン川畔のフランクフルト一帯に流浪した。

³ 長い詩とは、郭沫若の『鳳凰涅槃』を指す。長い手紙とは、郭沫若の1月18日の手紙を指す。

君の送ってくれた文章⁴はとても長いので、まだ詳細に見ていない。掲載されてから再度見るつもりだ。今号の詩学研究号⁵は枚数が多くて、二号に分けて載せることにした。仲蘇、舜生に出した手紙二通ともとても優美なものだそうだね⁶。それも出版後に見ることになった。李氏兄弟⁷とよく会うかい？漱瑜女史⁸も変りないか？近頃君の心中にまた何か不思議な靈感が生まれたら、それを聞かせてくれないか？

白華

【田漢より宗白華への手紙(1-2)】

白華兄：【1】

僕は、今沫若の家の二階の部屋にいる。

二階には二部屋があり――

僕は前の部屋に座っている、

窓を開けると、目の前に博多湾が見える。

湾の向こうに遠く山が広がり、

湾のほとりに五六軒の低い家がある、

目には小鳥が軽快に飛び舞う姿が見え、

耳には赤んぼがおぎゃあおぎゃあ泣く声が入る、

もし君がその児は誰と聞くなれば、

⁴ 田漢の長編論文『詩人と労働問題』を指す。この文章は1920年2月15日、3月15日に出版された『少年中国』雑誌第一巻第八、九の二期に連続して発表した。

⁵ 1920年2月15日と3月15日に出版した『少年中国』雑誌第一巻第八期と第九期は「詩学研究号」となり、上下二集に分け、多数の新詩作品と論文を登載。

⁶ 仲蘇、即ち黄仲蘇、またの名は黄玄。1895年生まれ、安徽舒城の人である。少年中国学会南京分会の会員。舜生、即ち左舜生(1893-1969)、字は学訓、湖南長沙の人である。少年中国学会の会員で、国家主義を標榜。田漢の二通の手紙は1920年3月15日に出版した『少年中国』第一巻第九期に発表。

⁷ 李任と李傑を指す。湖南の人で、田漢が日本に留学した時の友人である。

⁸ 易漱瑜を指す。田漢の妻で、当時田漢と一緒に日本に留学していた。

ひゃあ、驚くなよ！白華！彼は沫若兄の二番目の「芸術の産物」！（？）、
或いは、二度目の「罪悪の産物」だよ。

田 漢

白華：【2】

昨日、沫若と太宰府へ行ってきたよ。梅の花を見て、写真を撮り、歌も歌ってきた。二日市から歩いて行き、歩いて戻ってきた。とても愉快で楽しかった。写真を送って来たら、君にも一枚を送ろう。

今日、午後4時19分の汽車で東京に戻るつもりだ。東京ではやらなければいけないことが山ほどあるから。しかも鄭伯奇兄が東京に来る手配をされていて、僕は迎えに行かなければいけないんだ。君は今どんな文章を書いている？僕らの通信社のために『時事新報』の購読手続きをしてくれないか？この前に送った Kleeblatt には、手紙があと二通漏れていたの、ここで一緒に送る。

田 漢

九，三，二十三日。

附：『三葉集』序文¹

田漢の序文

「Kleeblatt」【ドイツ語。英語では Clover クローバー】は白華、沫若そして私の三人の通信集をまとめたものである。手紙を書いたときには、もとより発表しようという気持ちはなかった。その後のやりとりで、書いたものがたまった。大体はゲーテが中心で、ほかに詩歌を論じたもの、近代劇を論じたもの、婚姻問題、恋愛問題を論じたものがあり、また宇宙観や人生観を語ったものもある。われわれ三人は、二人は海の東に、一人は海

の西にいる²。また一人は東京湾のほとりに、一人は博多湾の傍にいる。しかしながら、尺牘〔手紙〕を頼りに精神を通わせ、間断なく心を通わせており、述べている文字は、すべて真情の発露であって、真剣で誠実な態度で書いたものである。

私は今これらの書簡をすべて一集にまとめて発表し、「Kleeblatt」と名付けることを呼びかける。

Kleeblatt はラテン文字では Trifolium 【トリフォリウム。3枚の小葉をもつマメ科の植物。Clover の学名】と綴る、三つの葉をもった植物で、普通は三人の人間の友情の結合の象徴に用いる。われわれ三人の友情は、この Kleeblatt が結びつけているのだ。

本書に収めたもろもろの手紙は、前後を合わせればたとえば一卷の Werther's Leiden (「若きウエルテルの悩み」) である。Goethe (ゲーテ) がこの本を発表するや、ドイツ青年の間で Werther fieber (ウエルテルブーム) が大いに巻き起こった！「Kleeblatt」の出版後には、我が国の青年の間に、必ずや Kleeblatt fieber 【三つ葉ブーム、或いは三葉集ブーム】が大いに起こるだろう！

宗白華の序文

諸君！われわれはなぜこの小冊子を発行しようとするのだろうか？われわれがこの小さな書物を刊行する動機は、決して諸君に一冊の文芸娯楽品を捧げ、諸君の酒やお茶のあとの暇つぶしにしてもらいたいからではない。また諸君に一冊の学術理論の参考書を提供し、諸君の疑問解決の資料にしてもらいたいからでもない。われわれはある重大かつ緊急の社会的、道徳的問題を提起し、諸君に公開の討論と公開の判決を下してほしいのである！

その問題とは何か？問題の範囲は非常に広い。簡単に概括して言えば、つまりは「婚姻問題」で

¹ 底本とした『郭沫若全集』文学編、第15巻所収の三つの序文には孫玉石教授による、宗白華、ゲーテ、田漢の簡略な説明、Werther's Leiden と Werther fieber の中国語表記が脚注として付せられているが、省略した。

² 当時郭沫若は日本の九州島北部福岡の九州帝国大学医科で学び、田漢は東京高等師範で学び、宗白華は上海にいた。

ある。分けて言えば、つまりは、(一) 自由恋愛問題、(二) 父母が子に代わって結婚を決める制度の問題、(三) 父母が子に代わって結婚を決める制度下での自由恋愛の問題、(四) 父母による子の結婚の代理決定制と自由恋愛の衝突から生まれる不幸は、誰がその責任を負うかという問題、である。

このいくつかの問題の解決こそ、われわれのこの小さな書物の最後の目的である。どうか社会の諸君には、われわれの期待に背かれざらんことを！

郭沫若の序文

二つの心が、えいっ！俺の胸の中に住みついでいて、

人の心【欲望の心】は道德の心と別々になる。

人の心は歓楽の中に耽溺し、

この汚濁した世界に執着している。

道德の心は激しく凡俗を超越し、

より高い霊の地帯に飛んで行こうと思っている。

ああ！宇宙にもし精霊が存在し、

この天地の間で主宰するのならば、

どうかあの金色の彩霞の中から降臨し、

われらを新鮮で、絢爛たる生命の中に引き連れて
いていただきたい！

沫若、ゲーテの『ファウスト』より訳出し、序に代える。 【完】

本文のテキストと翻訳について

本文は『三葉集』に収める、宗白華の田漢宛書簡一通、郭沫若宛書簡七通、そして田漢の宗白華宛書簡二通の翻訳である。底本、注釈は前回と同じで、『三葉集』（田漢・宗白華、郭沫若著 上海書店刊行 1982年6月）を底本とし、脚注部分は『郭

沫若全集』文学篇 第15巻（人民文学出版社 1990年7月）の孫玉石（北京大学教授）注を全訳することとした。そのために日本の中学生レベルの英単語、例えば、life, loveなどの注、「生活」「愛」も、煩をいとわずすべて訳出した。ただし、一部内容を改めたり、増やした箇所があるのも、前回と同様である。

また、この翻訳の作業の経緯は前稿（「我的作詩的経過」と『三葉集』その1、2）と同様である。

訳注 本文の単語など原本の脚注以外に注釈が必要と判断したものは当該の語の直後の【 】内に示した。

補注 本文中、背景の説明が必要と判断したものは、以下に「補注」として掲げた。

【補注1】『三葉集』に収録されているものとしては、これが宗白華から郭沫若への最初の手紙である。郭沫若も田漢宛の最初の手紙（1920年2月15日付）で、宗白華のこの手紙に触れ「白華兄から最初に来た手紙は、先月中旬のころでした」（『東海大学経営学部紀要』第4号、2016年3月、16頁）と書き、この箇所を引用している。ただ、ここには「昨日あなたからの手紙と新詩を受け取り、云々」と書かれているから、これは郭沫若が宗白華に出した手紙の返書、とすることになるが、それがどういうものかは不詳。今後の調査に待ちたい。

【補注2】鳳凰は詩「鳳凰涅槃」（1920年1月20日執筆）、天狗は詩「天狗」（同年1月30日執筆）に描かれた神話伝説上の存在。この2首はいずれも『女神』（1921年）に収録された郭沫若の代表作。

【補注3】「小詩」は1920年代初期から流行し始めた短詩である。周作人によれば「一行から四行くらいの新詩である。こういう新詩は形式上は多少新しく珍しいようだが、実は普通の抒情詩にすぎず、昔から存在したものだ。」（「論新詩」『覚悟』1922年6月）と書いている。小詩は、タゴール

¹ 現在は、ゲーテは「歌徳」、ファウストは「浮士徳」と漢語訳するが、郭沫若の原文では「哥徳」、「浮司徳」となっている。詩は『ファウスト』第一部「城門之前」のファウストの歌の一節。なお、『三葉集』では、この前にドイツ語の原詩がおかれているが、ここでは省略した。

の詩や日本の俳句、短歌の影響下に生まれ、人々に歓迎された。一時は小詩を作る者は非常に多く、小詩運動の観を呈したが、「短いという形式だけ残り、刹那の感覚を捉えることができず、また字の少なさという利点を生かせず、簡単だということだけに目を向けたため、作品は小詩のもつ味わい、余韻を失った。」(朱自清「中国新文学大系・詩集・導言」1925年)とされ、1925年以後運動は次第に廃れた。主な作者に、冰心、劉大白、朱自清、沈尹默、劉半農、兪平白、康白清らがいる。また、この手紙を書いた宗白華自身が小詩運動の中心的作者の一人だった。彼には小詩集『流雲小詩(流れる雲)』亜東図書館、1923年、がある。

【補注4】中唐から宋代に盛んになった韻文。当時の歌謡曲の歌詞。

【補注5】時珍は、本名魏嗣鑾、四川省蓬安県の人。郭沫若の成都高等学堂分設中学塾時代の学友。郭沫若は1906年に樂山にあった嘉定高等小学堂に入学、翌年嘉定府官立中学堂に入学、1910年成都の四川官立高等学堂分設中学堂に転入する。1912年、分設中学堂が廃止されたのにもない、成都府中学に編入し、同年卒業。1913年春成都高等学校理科に入学、翌年卒業しないまま日本に向かう。小学入学から中学卒業までの6年間、彼はつねに教師に反抗する学校の問題児であった。嘉定高等小学校では校長に反抗、生徒とともにストライキを行い、首謀者として除籍になっている。嘉定中学校でもストライキを主導して除籍。成都の中学校に転入したのはそのためである。その成都中学校でも学生代表として国会開設の請願活動をやり、またも除籍の扱いを受ける。「君たちが以前に起した騒動」とは、こうした経歴を指しているだろう。

【補注6】郭沫若が田漢に宛てて書いた最初の手紙(1920年2月15日付、東海大学経営学部紀要第4号、2016年3月に訳載)を指すのだろう。この手紙の中で、郭沫若は、自分と佐藤富子との恋愛から同棲にいたるいきさつと、すでに子供のいることまでを詳しく綴り、「ああ！寿昌兄！僕は

結局自分のひ弱な魂に自信をもちすぎていました！僕たちが同居して間もなく、僕の魂は一敗地に塗れてしまいました！僕の安娜もついに僕がダメにしてしまったのです！」と書き、さらに自分が既婚者で、故郷の四川には妻もいることを告白し、「君は自分が不良少年だと言いましたが、僕はまるっきり罪悪の精髓です。(略)僕のような人間でも、君の「兄」になる資格などありますか？どうぞ早く死刑の判決を下してください！」という語で手紙を終えている。

【補注7】松社：元は上海徐家匯にある安徽商人王効山の私宅「餘村園」(1909年に建造、現天平路135号)である。民国7年(1918年)、梁啓超、李烈鈞などが資金を集め、「餘村園」を購入し、整備した。その結果、木陰が小径を挟み、花木が咲き誇る庭園となった。ここで「松社」を成立し、蔡鏑將軍(1882-1916)を記念して松坡図書館を設置した。民国12年(1923)に梁啓超(1873-1929)が「松社」と「松坡図書館」を一緒に北京へ移した。

解説(岩佐昌暲)

顧文先生とともに、翻訳、注釈をすすめ、『東海大学総合経営学部紀要』に、第5号(2012年)から連載してきた『三葉集』翻訳が、今回の文章(序文3、手紙10通)で、いよいよ終わる。そこで、今回の「解説」では、『三葉集』の内容、その成立に大きな役割を果たした宗白華の経歴、彼を中心にしてきた『三葉集』成立の経緯、『三葉集』の郭沫若研究における意義などを述べて、この翻訳作業のまとめにしたいと思う。

『三葉集』とは

『三葉集』は、宗白華、郭沫若、田漢という、出発期の中国現代文学界でようやく頭角を現し始めた三人の文学青年が、1920年1月から3月までの短い期間に交わした20通の書簡に3名の序文各1編を加えてまとめた往復これは書簡集である。その内訳とそれぞれの翻訳の紀要掲載号(数字は刊行年度)は以下の通りである。

序文 計3編〔今号(2019年)〕

郭沫若 計7通

宗白華宛4通〔2012年1通、2013年2通、2014年1通(上)、2015年1通(下)〕

田漢宛 3通〔2016年3通すべて掲載〕

田漢 計5通

郭沫若宛3通〔2017年3通(3通目は半分)、2018年3通目の残り〕

宗白華宛2通〔今号(2019年)2通〕

宗白華 計8通

郭沫若宛7通〔今号7通〕

田漢宛 1通〔今号1通〕

『三葉集』は、1920年5月、上海亜東図書館(「図書館」は出版社のこと)から刊行された。その書簡で述べられた内容のあらまは、田間と宗白華の序文に簡明に要約されている。

《Kleeblatt【ドイツ語。英語ではCloverクローバー】は白華、沫若そして私の三人の通信集をまとめたものである。(中略)大体はゲーテが中心で、ほかに詩歌を論じたもの、近代劇を論じたもの、婚姻問題、恋愛問題を論じたものがあり、また宇宙観や人生観を語ったものもある。(中略)私は今これらの書簡をすべて一集にまとめて発表し、「Kleeblatt」(三つ葉)と名付けることを呼びかける。》(田漢)

《われわれがこの小さな書物を刊行する動機は、(中略)ある重大かつ緊急の社会的、道徳的問題を提起し、諸君に公開の討論と公開の判決を下してほしいのである！／その問題とは何か？問題の範囲は非常に広い。簡単に概括して言えば、つまりは「婚姻問題」である。分けて言えば、つまりは、(一)自由恋愛問題、(二)父母が子に代わって結婚を決める制度の問題、(三)父母が子に代わって結婚を決める制度下での自由恋愛の問題、(四)父母による子の結婚の代理決定制と自由恋愛の衝突から生まれる不幸は、誰がその責任を負うかという問題。(中略)このいくつかの問題の解決こそ、われわれのこの小さな書物の最後の目的である。》(宗白華)

『三葉集』という書名については、やはりこの序文で田漢がこう述べている。

《Kleeblattはラテン文字ではTrifolium、三つの葉をもった植物で、普通は三人の人間の友情の結合の象徴に用いる。われわれ三人の友情は、このKleeblattが結びつけているのだ。》

『三葉集』成立の経緯

ところで、このような往復書簡はどういう経緯で生まれたのだろうか。

これについてはこの翻訳連載の第1回『三葉集』その1「郭沫若より宗白華への手紙」(東海大学総合経営学部紀要第5号(2012年))の解説でも書いたが、その直接のきっかけを作ったのが宗白華であった。宗白華についてはこれまでの解説のなかでも余り詳しく触れていないので、ここで『三葉集』誕生の経緯の説明を兼ねて、紹介しておきたいと思う。(実はこの経緯については、第1回で書いた解説とほとんど重複することをお断りしておきたい。)

まず宗白華から。宗白華が『中国現代作家伝略』(下)徐州師範学院編、1983年5月四川人民出版社刊、のために書いた「自伝」によれば、彼の経歴は以下のようなものである。

「宗白華(1897-1986)、本名宗之樾、【母方の実家である】安徽省安慶市生まれ、【祖籍は江蘇省常熟】。後、父が南京で新式小学校を創設したため、幼時を南京で過ごした。17歳の時青島に行き、青島大学でドイツ語を4年間学び、言語学科を卒業した。青島大学はドイツ人の創設した大学である。五四時期、上海時事新報に招かれて副刊『学灯』の編集にあたった。当時「少年中国学会」(後述)に参加し、月刊の会誌『少年中国』の編集と刊行を手伝っていた。そのころ郭沫若が日本で医科を学び、ドイツ文学(ゲーテ)を研究していたが、文章を『学灯』に投稿してくれていた。私はそれを非常に気に入り、原稿が来れば直ちに掲載したが、それが彼の書くことへの興味を引き起こした。私は田漢に郭沫若を訪ねるように紹介した。彼

らは私に長い手紙をくれて、後に上海亜東書局がわれわれ三人の手紙を集めて出版したいと求めた。『三葉集』と名付けたが、当時の青年たちの興味を引きおこした。

1920年5月第一次世界大戦が終わると、ドイツマルクが下落した。私はさっそく舟に乗ってパリ経由でドイツに留学し、哲学、美学おとび歴史哲学を学んだ。1925年帰国、南京大学哲学系で教えた。日本が中国を侵略、南京を占領したので、学校と共に重慶に移った。1945年日本侵略軍が投降し、学校とともに南京に帰った。1952年北京大學哲学系に異動となり、美学組で教鞭を執った。著作に中国美学問題を研究した論文集【『美学散歩』であろう】があり、間もなく上海文芸出版社から出版の予定。(1981年4月執筆)

以上が宗白華自筆の自伝である。

ただこの自伝は簡潔すぎていろいろな情報が書かれていない。他の資料で経歴などを少し補足しておきたい。

郭沫若は19年9月から上海の新聞『時事新報』副刊『学灯』に詩を投稿し始め、それが次々に掲載されたことから詩作熱にとりつかれる。当時無名の医学生に過ぎなかった郭沫若の詩を認め、積極的に掲載したのが『学灯』編集責任者だった宗白華だったのである。宗白華は20年1月3日郭沫若に手紙を送り、彼の詩才に賛辞を捧げるとともに、東京留学中の田漢を紹介し、二人の「東方未來的詩人」(アジアの未來の詩人)が交流するよう希望した。(それが今回翻訳したものである)宗は郭沫若からの返書を受け取ると、その返書と郭の詩を同封した手紙を田漢に送り、郭を紹介した。三人の交流はここから始まる。

これより前、中国では日本の中国侵略に反対する青年、学生の愛國運動が盛んであったが、その運動を積極的に進めた団体に少年中国学会(この団体は18年から活動を始めたが正式に成立したのは五四運動後の19年7月)があり、『少年中国』という機関誌を発行していた。田漢と宗白華はその会員で、お互いに知り合いだったのである。田

漢は、『少年中国』誌上に、郭沫若が大きな影響を受けたと述懐しているホイットマンを紹介するなど、論客としてすでに知られていた。

宗白華は『学灯』で働くようになるや、編集者として才能ある書き手を発掘すると同時に、若い書き手同士を結びつけることに喜びを感じていたように思われる。宗は郭の投稿の少し前から『学灯』の編集に当たり、翌20年3月、ドイツ留学のため上海を離れるまでその任にあった。この三人の交友はその後も続くが、編集者と執筆者としての通信は、これをもって終わりを告げる。その二ヶ月後の5月『三葉集』が出版されるが、これは田漢が企画編集したものだった。

田漢は、上に見たように序文で、「手紙を書いていたときには、発表しようという気はなかった」と述べている。だが手紙の交換が増えていくうち内容も多くなっていく。田漢によれば「だいたいゲーテを中心にしていたが、ほかに詩論、近代劇、結婚問題、恋愛問題を論じたもの、宇宙観や人生観を論じたものもあった」。

それを往復書簡集として出版しようとした理由は何も書かれていない。(宗白華の序文では、この本を出版する目的は「婚姻問題」の解決に資することだと述べている。)しかし田漢序文の最後が「本書に収めた書信は、前後を合わせれば例えば一卷の『若きウェルテルの悩み』のごとくである。ゲーテがそれを発表するやドイツの青年の中でウェルテルブームが巻き起こった!『三葉集』が出た後には、我が国の青年の中に、必ずや三葉ブーム、或いは三葉集ブームが大いに起こるだろう」という語で結ばれていることから、彼らが五四以後の中国青年に、問題提起を行なおうとしていたこと、またその問題提起が大きな反響を呼ぶと確信していたことが窺える。

事実、田漢の豪語したように『三葉集』は当時の青年たちに受け入れられたようで、郭沫若も「『三葉集』は出版後かなり当時の歓迎を受けた」(『創造十年』)と書いている。余談だが、田漢は『三葉集』の評判が高かったので別の友人を入れ

た往復書簡集『新三葉集』を出そうと計画、郭沫若に持ちかけたが、断られている（『創造十年』）。以て彼らの問題意識が五四運動によって喚起された青年たちの精神に呼応する新しい観念・視点をもつものだったということが知られる。五四時期精神史の重要な資料ともなるものである。

書名の『三葉集』の「三葉」はクローバー Kleeblatt のことで、書名にこれを選んだのは、「クローバーは普通三人の人間の友情の結びつきの象徴として用いられる」からと田漢が説明する通りであろう。

『三葉集』の郭沫若研究における意義

『三葉集』については、郭沫若が「これは“五四”（文化運動の）潮流のなかで、胡適の『嘗試集』【1920年】を継ぐ、文学的意義のある2番目の集だ」と述べているという（李斌『女神之光：郭沫若伝』作家出版社、2018年10月、72頁。岩佐は出所を確認していない）。執筆者本人の言とは言え、中国現代詩史における郭沫若、新劇史における田漢、美学史における宗白華の占める文学史的位置を考えれば、これら現代文学の巨匠たちの若年の文学観、社会認識、人生観などを吐露した書簡集が、『嘗試集』に継ぐものだという評価はそれほど過大とはいえないのではなかろうか。

最後に『三葉集』について、文学史的意義を述べる段取りである。だが、中国現代文学史全体を見渡して、そこに『三葉集』を位置づけるだけの力は、いま筆者にはない。そこで、郭沫若研究（もう少し広げて、創造社文学といってもいいかもしれない）における『三葉集』の意義を、われわれがなぜ『三葉集』を翻訳したのか、を語ることで述べてみたい。

われわれがこれを翻訳したのは、郭沫若への関心からである。具体的にはこの本に20年1月から3月という時期の郭沫若の文学観や、心情が率直に語られているからである。この時期の郭の思想（汎神論）や詩作については『創造十年』に整理された記述があり、また「我的作詩的経過」（『東

海大学総合経営学部紀要』第4号、2011年に翻訳掲載）のような回想記がある。だがそれらはいずれも後に書かれた文章であり、この手紙がもっているような生々しさ、迫力といったものに欠けている。勿論、執筆された時期が書かれている内容の真実性を保証できるわけではない。むしろ後に冷静に振り返る方が、当時の心情を正確に記述できているということもあるだろう。しかし『三葉集』に書かれている心理的「事実」（それとて本当に事実かどうかは分からないのではあるが）や「文学観」（というより「詩観」と言う方がいいか）などには執筆時期の郭沫若の心情の真実が含まれているように思う。

こうしたことのほかに、郭沫若の当時の文学観、とくに詩論がどのようなものであり、それがどのように形成されていくかが分かったこと、郭沫若の詩作品や、翻訳が、手紙の中に初出の形で相当数出現すること、それがいかなる（主観的、客観的）状況下で書かれたものかが記されていることで、それぞれの詩の深い解読が可能になったこと、などがあげられる。

さらに、田漢が大正期の日本文化から全面的に（演劇のみならず、さまざまな分野の文化から）深い影響を受け、それを消化していること、田漢ほど直接的ではないにせよ、郭沫若もまた大正期の文化から、幅広く、深い思想的影響を受けていること、など大正文化と郭沫若たち日本留学生の関係、中国留学生からみた大正文化研究という主題の必要性が浮かび上がってきたこと、などを付け加えることができる。

以上草卒の間に記した走り書きであるが、『三葉集』が郭沫若研究につきつける問題は、広く大きいものがあることを強調しておきたい。
(2019/10/20 補遺)